

**主 題：王に捧げる愛の歌****聖書箇所：詩篇45篇**

テーマ：偉大な王であるイエス・キリストに相応しい愛をもって今を歩んでいるか？

今朝一緒に学んでいくのは、詩篇の45篇のみことばです。いつものように聖書のことばを読みますが、その前に、この詩篇に付いている表題に注目してみてください。45篇の数字の下、表題のところにこんなことばが記されていました。「指揮者のために。「ゆりの花」の調べに合わせて。コラの子たちのマスキール。愛の歌」この詩篇は「愛の歌」と言われていました。これを、少し頭の片隅に入れておいてください。この詩篇は、私たちがいつも見るようなものとは大きく違ってしています。神様への祈りであったり、賛美であったり、また著者自身が持っていた苦しみや葛藤、そういったものはここにはいっさい出てきません。その代わりに、この詩篇は最初から最後まで、愛にあふれていました。結婚式を控えた王様に対して、著者が綴っていた愛や喜びにあふれていました。著者は自分自身の王様に対する愛を歌にしてここに綴っていました。では実際にどんなことばが記されていたのか、みことばを見てみましょう。

**詩篇45篇**

指揮者のために。「ゆりの花」の調べに合わせて。コラの子たちのマスキール。愛の歌

「:1 私の心はすばらしいことばでわき立っている。私は王に私の作ったものを語ろう。私の舌は巧みな書記の筆。:2 あなたは人の子らにまさって麗しい。あなたのくちびるからは優しさが流れ出る。神がとこしえにあなたを祝福しておられるからだ。:3 雄々しい方よ。あなたの剣を腰に帯びよ。あなたの尊厳と威光を。:4 あなたの威光は、真理と柔和と義のために、勝利のうちに乗り進め。あなたの右の手は、恐ろしいことをあなたに教えよ。:5 あなたの矢は鋭い。国々の民はあなたのもとに倒れ、王の敵は気を失う。:6 神よ。あなたの王座は世々限りなく、あなたの王国の杖は公正の杖。:7 あなたは義を愛し、悪を憎んだ。それゆえ、神よ。あなたの神は喜びの油をあなたのともがらにまして、あなたにそそがれた。:8 あなたの着物はみな、没薬、アロエ、肉桂のかおりを放ち、象牙のやかたから聞こえる緒琴はあなたを喜ばせた。:9 王たちの娘があなたの愛する女たちの中にいる。王妃はオフィルの金を身に着けて、あなたの右に立つ。:10 娘よ。聞け。心して、耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家を忘れよ。:11 そうすれば王は、あなたの美を慕おう。彼はあなたの夫であるから、彼の前にひれ伏せ。:12 ツロの娘は贈り物を携えて来、民のうちの富んだ者はあなたの好意を求めよう。:13 王の娘は奥にいて栄華を窮め、その衣には黄金が織り合わされている。:14 彼女は綾織物を着て、王の前に導かれ、彼女に付き添うおとめらもあなたのもとに連れて来られよう。:15 喜びと楽しみをもって彼らは導かれ、王の宮殿に入っていく。:16 あなたの息子らがあなたの父祖に代わろう。あなたは彼らを全地の君主に任じよう。:17 わたしはあなたの名を代々にわたって覚えさせよう。それゆえ、国々の民は世々限りなく、あなたをほめたたえよう。」

**○愛する王にささげられた曲：**

さて皆さん、間違いなく、この著者が王様に対して書いていたということは、読み取れたでしょう。では、王様に対して著者が抱いていたあふれんばかりの愛というものは、読み取れたでしょうか？この詩篇を見ていくにあたって、歴史的背景をお伝えできればよいのですが、残念ながら歴史的背景に関してはよくわかってはいません。ここで何度も出てきた「王」という存在が、かつてのソロモン王ではないか、と考えている人もいます。ただ詳しいことは私たちにはわかりません。しかしそれがどんな王であったとしても、私たちはこの詩篇のうちに、ひとりの人物が抱いていた王様に対する深い愛、深い愛情を見て取ることができます。そして、実はこの詩篇は“メシア的詩篇”とも言われるのですが、この

詩篇の中にはさまざまところに、王であるイエス・キリストの姿をも見て取ることができます。そうすると、この45篇は、当時の文脈で考えれば、著者が王様に対して愛を綴っていることばを見ることができ、もう少し広い範囲で神学的に考えれば、預言としての約束されていたイエス・キリスト、王であるイエス・キリストのその姿を、この同じ詩篇の中に見て取ることができるというわけです。同じ王様に対してささげられた「愛の歌」をこの中に見て取ることができます。では、そんな詩篇からいったい私たちは何を学ぶのか？

改めて少し考えてみてください。私たち自身は、王であるイエス・キリストに対して、いつもふさわしい愛を持っているのでしょうか？これから見ていくこの詩篇の著者は、地上の王であるある人物に対して、とてつもない喜びやとてつもない感謝を持っていました。それと比べたときに、果たして私たちは、偉大な王であるイエス・キリストに対して、喜びや感謝を持っているのでしょうか？ぜひそのことを比較しながら、このみことばと一緒に考えてみましょう。「愛の歌」が私たちに、王に対して私たちがどう愛するべきなのかを教えてください。少しだけ皆さんに先に言うと、この詩篇は1-17節で成り立っていますが、私たちは大きく二つ、1-9節とそれ以降に分けて考えてみます。そして前半の1-9節では、この著者が愛を表していた王様が実際にどんな存在だったのかという、王様の特徴について考えてみます。それが前半です。そして後半は、ではそのすごい王様を見た後で、そのすごい王様に対してどのように私たちが応答するべきなのか、どのようにこの当時の人は応答していたのかを見たいと思います。

## 1. 王の特徴 1-9節

まず1節から私たちが見て取れるのが、「王の特徴」です。この愛の歌を作った著者が、いったいどんな王様を愛していたのか、そのことを特にここに三つ見て取ることができます。まず1節はこんなふうに始まっていました。「私の心はすばらしいことばでわき立っている。私は王に私の作ったものを語ろう。私の舌は巧みな書記の筆。」と。王様の特征に入っていく前に、まず著者の心を見てみましょう。著者の心は何と言われていました？ここで「すばらしいことばでわき立っている」と言われていました。著者の心はすばらしいことばでわき立っていたのです。この「わき立っている」ということば、これには、「思いや感情がかき立てられている様子」「何かがあふれ出しそうになっている様子」といった意味が含まれています。思いや感情が心の中でわき立っているのです。いっぱいになってあふれ出しそうになっているのです。まるで水を入れたやかんを温めていると次第にグツグツ煮え立って、気をつけていないとやかんから熱湯があふれ出してしまうように、文字どおり作者の心の中には、王様に対する熱い思い、熱い愛がわき立っていました。あまりにも王様のことを愛していたからこそ、その愛情や熱意を彼は心のうちに留めたままにすることができなかつたのです。そしてその心から出てきたものが、ここに記されている「愛の歌」でした。彼は、無理やりにだれかから強制されてこの歌を記したのではありません。もちろん悲しみや不満の中から記したのでもありません。口を開いたときに自然に賛美や称賛があふれ出てきたような、そんな喜びに満ちあふれた心で彼は王様に対することばを2節から綴ったわけです。では、彼が綴っていたその王様はいったいどんなお方だったのでしょうか？どうしてそんな大きな喜びを彼の心にもたらしたのでしょうか？

### 1) 王の持つ優しさ 2節

2節からまず一つ目の特徴が挙げられていました。王様の一つ目の特徴、それは「王の持つ優しさ」でした。2節を見ると王に対してこのように言っています。「あなたは人の子らにまさって麗しい。あなたのかちびるからは優しさが流れ出る。神がとこしえにあなたを祝福しておられるからだ。」と。作者が愛していた王は、ほかのだれにもまさってすばらしいお方でした。そして何よりもその王の口から出ることばは、優しさにあふれたものだったというわけです。この「優しさ」と訳されていることばには、単なる「優しさ」という意味に加えて、例えば「品位がある」とか、「恵み深い」「あわれみ深い」といった

意味も含まれていました。同じことばは伝道者の書にも使われています。伝道 10 : 12 「知恵ある者が口にする**ことばは優しく、**」2017年版では、ここは「**恵み深く**」とあります。「**愚かな者のくちびるはその身を滅ぼす。**」知恵ある者の口にする**ことばは優しい**と。これと同じことばが使われているのです。ですから、王様が語る**ことばは**、間違っても民を傷つけるようなものではありませんでした。知恵や思慮に欠けた愚かなものでもありませんでした。この王様は、乱暴な口調によって人々を**ことばで**支配しようとするような者ではなく、逆に、その優しい**ことば**でもっていつも励ましを、慰めを与えようとするような王だったのです。もちろん民はそんな王様に耳を傾け、恵みに富んだその**ことば**のうちに大きな喜びを見出していたでしょう。そうしたら容易に想像できません？当時の作者は、そんな優しい王様の姿を知っていたのです。その王様の姿を覚えたときに、私はこの王様のことを愛していると。当時の著者にとってこの王様は優しいお方でした。

でも皆さん、同時に、今の私たちは、この作者が愛した王よりもはるかにすぐれて優しい王を知っています。いったいだれのことか？その方こそが、イエス・キリストでした。イエス・キリストこそ、どんな王よりもはるかにまさって優しいお方だったのです。みことばは、そんな姿をはっきりとこんなふうにも口にしていました。ルカ 4 : 21 - 22 「:21 イエスは人々にこう言って話し始められた。「**きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました。**」:22 **みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。**…」イエス様の口から出てきた**ことばは**、恵みの**ことば**でした。そしてイエス様の語っておられるその**ことばが**、いつもあまりにも力強く、知恵や恵みに富んでいたからこそ、イエス様の敵たちでさえそのことを認めざるをえませんでした。彼らも驚いてこう口にしていたのです。ヨハネ 7 : 46にこう書いていました。「**役人たちは答えた。「あの人話すように話した人は、いまだかつてありません。」**」と。

改めて少し思い返してみてください。イエス様の話された**ことばは**、どんな場面であろうとも変わらずに知恵や力に満ちあふれていました。恵みやあわれみに富んでいました。例えば福音を語っていた時、イエス様はどうでした？イエス様は、たとえ反対する者がいたとしても、権威を持って大胆に語り続けておられました。ご自分のもとに助けを求めてやって来る者がいたら、イエス様はその人たちに対しても喜んで救いの真理を教え続けておられました。もし自分のもとに、傷ついて、重荷を持って疲れた者がやってくれば、イエス様は愛を示して、ご自分のうちにこそ十分な休息があるのだと、人々を招いておられました。イエス様が実際にこう言われていたのです。皆さんもよく知っている箇所の一つでしょう。マタイ 11 : 28 - 30 「:28 **すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**:29 **わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。**:30 **わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。**」と。間違いなくイエス様は、まことの神様であり、王の王でもありました。本来であれば、すべての者によって仕えられるべきそんな存在でした。でもすごいのは、この方が語られたその**ことばは**、恵みに満ちあふれ続けていたということです。心優しいこの方は、へりくだっていつも人々に仕えて、そしてどんなときもあわれみの**ことば**でもって人々に語り続けておられました。イエス様はそのようにして、傷ついた人々、救いを必要としている人々をご自分に引きつけておられたのです。そして何よりも感謝なのは、私たちも今、この恵み深いイエス様のうちにすべて必要な救いや慰めを見出すことができるということです。このイエス様が私たちもまだ引きつけてくださっているということです。私たちもこのイエス・キリストのうちに慰めを平安を見出し続けることができるということです。この優しいお方のうちに私たちは希望を見出すことができるということです。著者は地上の優しい王に対して感謝をささげていました。では、この地上の王よりもはるかにまさって優しいイエス・キリストを私たちが知っているのなら、私たちはこのイエス・キリストに対してどのよう

な喜びを、どのような愛を、どのような感謝をささげようとするのでしょうか？作者が愛していた王は優しいお方でした。

## 2) 王の持つ力強さ 3-5節

### ▶「雄々しい方」

でもこれだけでなく、二つ目の特徴は、「王が持っている力強さ」でした。続きの3節にこう書かれていました。「雄々しい方よ。あなたの剣を腰に帯びよ。あなたの尊厳と威光を。」ここでまず作者は「雄々しい方よ」と愛する王の姿を描いていました。この「雄々しい方」ということばは興味深いもので、「並外れた力を持っていて、ほかの者にはできないような偉業やわざを成し遂げることのできる存在」を表すものでした。例えばこの「雄々しい方」ということばを動物界に当てはめて使うと、箴言でこんなふうに出てきます。箴言30:30「獣のうちで最も強く、何ものからも退かない雄獅子、」と。ここに「最も強く」ということばが出てきました。これが「雄々しい方」と同じことばになるのです。獣界の中で並外れた力を持って、ほかのものとは比べることのできない存在、それは「ライオン」だと言ったのです。では、この同じことばが今度は星や天体に関して使われると、聖書の中でどんなふうに出てくるか？詩篇19:5にこのように出てきていました。「太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る。」この途中に出てきていた「勇士」と訳されていることばが「雄々しい方」と同じことばでした。天体や星に関して使われると、「太陽」を表していました。並外れた力を持っていてほかのものに並ばないもの、それは「太陽」だというわけです。ライオンや太陽、どちらもどれほどの力を持っているのかを改めて言うまでもないでしょう。でもここでのポイントは、それらと同じように、作者が愛した王というのもただ優しくただけではありません。それに加えて、ほかに並ぶもののない圧倒的な力を持っていたのだというわけです。優しいお方は、何もできない無力な存在ではありませんでした。どんな時も優しいことば、知恵にあふれたことばを発せられたその王は、同時に並ぶもののない強さも持っていました。著者はその王の姿を覚えていたのです。そしてその力強い王が腰に剣を帯びて戦いに出ていこうものなら、その結果はわかりきっていました。そのような王が出て行けば、確かな勝利が約束されていたのです。こんなすばらしい偉大な王の姿を覚えていた作者は、間違いなく深い確信、深い信頼を覚えていたでしょう。

でも、もう少し見ていくともっとすごいことが書かれていました。この同じ力強い王様は、圧倒的な力を持っていただけではありません。ある大切なことを覚えていました。4節にこんなふうに書いています。「あなたの威光は、真理と柔和と義のために、勝利のうちに乗り進め。…」と。力を持っていたこの王様は、敵との戦いに出ていきました。勝利に勝利を重ねていくのです。でも、何のためにと書いていました？この王様は強い力をもって、ただ敵を征服するために戦いに出かけていくのでしょうか？この王様は、ただ自分の土地や富を獲得するために戦いに出ていくのでしょうか？ただ自分自身の称賛や栄光のために出ていくのでしょうか？そうではないと言うのです。4節に書いていました。「あなたの威光は、真理と柔和と義のために、勝利のうちに乗り進め。」と。圧倒的な力を持っていたその王様は、自分のためではありませんでした。神様が喜ばれる真理と柔和と義のために勝利を収め続けるのだというわけです。そしてもちろん、そんな偉大な力を持っていた王様の前に立ってられるような者など、ひとりとしていませんでした。すべての者がその王様の前に恐れを覚え、そしてこの王様は完全な勝利を収められるようになるのです。4節の続きから見てもこう書いていました。「あなたの右の手は、恐ろしいことをあなたに教えよ。」その後「あなたの矢は鋭い。国々の民はあなたのもとに倒れ、王の敵は気を失う。」と。敵は立っていることさえできませんでした。作者はこんなにも力強い王の姿を覚えていたというわけです。優しく、でも、戦いになれば圧倒的な力をもって民を導き、勝利へと連れて行ってくれる、そんな王様の姿を覚えていました。どうして、作者のうちにあふれんばかり喜びがあったのでしょうか？

皆さん今なら想像できません？今なら見えてきませんか？こんな偉大な王様を彼は知っていたからこそ、そうやってこの神様に対して賛美をささげていたのです。それがこの当時の作者でした。

でも、私たちはこの作者が愛した王よりもはるかにすぐれて力強い、そんな勝利の王を知っています。だれですか？それこそ、イエス・キリストでした。今回の箇所に関してスポルジョンもこんなことばを残しています。「雄々しい方」という称号に関して、「(雄々しい方)」という称号は、当然価値するものであり、人間に与えられるような『殿下』といった空しい礼儀上だけの、虚栄心を満たすような称号ではない。イエスこそ、真の英雄であり…この方こそ、力強く救う方、愛に満ち溢れた方なのである。」(チャールズ・スポルジョン) イエス様こそ、力強く、救うことのできるお方でした。愛に満ちあふれたお方でした。その通りですね。イエス様は確かに心の優しい王でもありました。でも、それと同じぐらい偉大な力に満ちたお方だったのです。この方は偉大な力に満ちていたからこそ、いろんな場面で神様にしかできない奇跡を数々起こし続けていました。嵐を沈めることがあれば、悪霊を追い出すこともあったり、病をいやされたことだって何度も何度もありました。それに加えて、いやそれ以上に、この方は約束どおりに十字架にかかって、そして三日目によみがえり、だれにもできなかった罪や死の力に、サタンに勝利してよみがえったお方でもあったのです。この方こそ、すべてにまさって偉大な力ある勝利者でした。みことばもはっきりと宣べています。例えばIコリント15:56-57に「:56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。:57 しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」ヘブル2:14-15にも「:14 そこで、私たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、:15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」と、みことばも繰り返し教えていました。まさにこの方イエス・キリストこそ、圧倒的な力を持つ救い主であり、勝利者でした。もちろんこの方はご自分の思いや権利を主張することもできました。自分自身のために力を使うことも発揮することもできました。でもこの方は、最後の最後まで父なる神様のみこころに従って、へりくだってご自分のいのちをささげてくださいました。自分のためにすべてのことを成していたのではありません。真理と柔和と義のために、この方はみずから進んで苦しみを受けて、痛みを覚えて、そしてご自分を信じるすべての者に救いを、いや何よりも勝利をもたらしてくださいましたというわけです。かつての著者は地上のひとりの偉大な力を持った王に対して愛の歌を歌っていました。では、今の私たちはどんな愛の歌をこの力強いイエス・キリストに対して歌おうとするのでしょうか？私たちが罪から救い出してくださいました、私たちに勝利を約束してくださいましたそんな偉大なお方を覚えるのなら、私たちはどんな賛美をこの方に心からささげようとするのでしょうか？作者が心から愛していた王様、それは優しいお方であり、力強いお方でした。

### 3) 王の持つ正しさ 6-7節

でも、これで終わりではありません。最後にもう一つだけ、三つ目の特徴は、「王の持つ正しさ」でした。この王は、正しいお方でした。もう一度6節を見るとことばが続いていますが、少し気をつけて読んでくださいね。6節はこういうふうに書いていました。「:6 神よ。あなたの王座は世々限りなく、あなたの王国の杖は公正の杖。:7 あなたは義を愛し、悪を憎んだ。それゆえ、神よ。あなたの神は喜びの油をあなたのともがらにまして、あなたにそそがれた。」さて、これはどうでしょう？読んでいて少し混乱するかもしれません。何かおかしくありませんでした？作者はこの2節の間でずっと「王」と呼び続けていたにもかかわらず、ここだけ何と呼んでいました？6節の初め「神よ。」と呼んでいたのです。「神よ。あなたの王座は…」と。これは別に「王様」から主語が変わったわけではありません。著者は変わらずに王様に対して語り続けていました。そうすると、どういうことだと思います？何で作者は突然「王」のことを「神」と呼んだのでしょうか？作者は王様のことを愛しすぎたがあまり、その存在が偶像のようになってしまったのでしょうか？彼にとって「王様」という存在が「神様」のような存在だと言わんとした

のでしょうか？もちろんそうではありませんでした。これを理解する上で大きく二つのことが大切になります。

まず一つは、旧約において、神様の権威、力、神様のみこころ、そういったものをこの地上において代表する存在を、それが特別だからこそ、「神」と呼ぶことがあったということです。例えばあのモーセがまさにそうでした。出エジプト記の中にこんなことばが記されています。出エジプト7：1に

「【主】はモーセに仰せられた。「見よ。わたしはあなたをパロに対して神とし、あなたの兄アロンはあなたの預言者となる。」モーセに対して「わたしはあなたをパロに対して神と」と書いていました。でも皆さんは知っています。当たり前ですが、モーセは別に神様ではありませんでした。たったひとりの人間でした。でも彼はパロの前にあって、神様の目的を、神様に代わって果たす、神様に立てられた特別な存在であったからこそ、「神」というふうには呼ばれることもあったのです。ですから、ここで作者が言わんとしていたことは同じでした。彼は何も今まで語ってきたその王が急に神様になった、と言わんとしていたわけではありません。愛する王という存在が、神様によって立てられた特別な存在であることを表そうとしていたのです。そしてその王様がどんなお方だったか？その王様の支配はいつも公正で正しいものでした。こうして著者が愛していたその王様は優しく、力強いだけでなく、神様によって特別に立てられた、義を愛し悪を憎むそんな正しい者でした。だからこそ7節にも、そんな王のことを神様も喜ばれていた、と書いていました。そんな特別な王のことを間違いなく作者も愛していました。

でも皆さん、それが一つ目だとすると、この箇所を理解する上で、もう一つだけ大切なことがあります。それは、ここで記されているまさに「神」と呼ばれ、王座についておられるその王の姿、それこそが、イエス・キリストにおいて成就したということです。この6-7節に描かれている王の姿こそ、まさにイエス・キリストにあって成し遂げられたものでした。どういうことか？ご存じの方もあると思いますが、ヘブル1章の中には、父なる神様が、いかに御子が御使いよりもすぐれた偉大な存在であることを、繰り返し語っておられるのです。そして特に皆さんに注目してほしいのは、ヘブル1：8-9で、父なる神様は御子に対してこう言われていたのです。「：8 御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。：9 あなたは義を愛し、不正を憎まれます。それゆえ、神よ。あなたの神は、あふれるばかりの喜びの油を、あなたとともに立つ者にまして、あなたに注ぎなさいました。」と。皆さん、気づきました？詩篇45：6-7のことばが、まさにここに引用されていました。そして、このことばをもってだれを表していました？父なる神様は御子に対して「神よ。」と言っておられたのです。つまり、イエス・キリストこそまことの神だ、ということが言えるのです。そして何よりイエス・キリストこそ、かつて詩篇の著者が描いていたまことの王だったということです。この方こそ真の王でした。ほかのだれでもありません。イエス様こそが、まさに、ただ義を愛し、どんな悪さでも憎まれる、そんな正しいお方でした。イエス様こそが、ずっと約束され続けてきた救世主、神に油注がれたお方、神様が喜ばれたそんな存在でした。イエス様こそが、永遠に主権者として君臨され続けていく王の中の王だったのです。

少し立ち止まって考えてみてください。詩篇の作者はひとりの偉大な王に対して、あふれんばかりの愛や喜びを表していました。では、そんな王よりもはるかに偉大で、はるかにすぐれた最高の王を私たちが覚えるのであれば、私たちはこの方に対してどんな賛美をささげようとするのでしょうか？このお方向かって私たちはどんな感謝や礼拝を今表そうとしているのでしょうか？どうです？皆さん。私たちは本当に、みことばが教えているそのイエス・キリストの姿を正しく覚えているのでしょうか？覚えていると言うなら、それにふさわしい愛の歌を、いつも私たちはささげているのでしょうか？

さて、私たちはここまで詩篇45篇を見てきました。1-7節までで、著者は自分が愛していたその王様の特徴を挙げていました。そして結婚式の様子が8-9節にこう書かれています。「：8 あなたの（王の）着物はみな、没薬、アロエ、肉桂のかおりを放ち、象牙のやかたから聞こえる緒琴はあなたを喜ばせ

た。:9 王たちの娘があなたの愛する女たちの中にいる。王妃はオフィルの金を身に着けて、あなたの右に立つ。」と。華やかなその光景が描かれていました。豪華な衣装を身にまとったその王様は、美しい音楽がやかたの中で鳴り響いている中、ご自身も喜びに満ちあふれていたのです。そして最後9節、そこには王妃として迎えられる女性がいたのです。

そしてここで詩篇は少し視点を変えていきます。今までは王様に焦点を置いていました。そしてその王様に置いていた焦点を、今度は王妃に向けるのです。王様の妻になろうとする者に対して、著者はことばを贈っていました。何で贈っていたのかを少し考えてみてください。今まで見てきた1-7節では特に、どんなにこの王様が偉大なのかを著者は描いていました。偉大なお方だったのです。力強いお方だったのです。優しいお方だったのです。こんな王様に、どんな女性でも嫁ぐことができると思います？それはできませんでした。この王様にふさわしい女性が必要だったのです。では、この王様に嫁ぐことのできる女性とはいったいどんな存在なのか、どんな立場、どんな態度でいることが求められるのか、そのことを著者はこの曲の二つ目の部分10-15節で語っていました。王に受け入れられる態度、それがいったいどんなものなのかを私たちはこの箇所で見取ることができます。特に二つの態度が求められていました。

## 2. 偉大な王にふさわしい王妃の態度 10-15節

### 1) 王を一番に愛すること 10節

一つ目の態度は、「王様のことを一番に愛すること」でした。10節はこう続いています。「娘よ。」と語りかけていました。「娘よ。聞け。心して、耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家を忘れよ。」と。作者はここで王妃となる者に向かってはっきりと「あなたの民と、あなたの父の家を忘れよ。」と口にしていました。「忘れよ。」と言ったとき、いったい何を言わんとしていたのでしょうか？簡潔に言うなら、これは王と結婚するにあたって、その者は最も身近な家族や友人、これまでの生活のすべてでさえ捨て去る覚悟が必要だ、というわけです。結婚するまでは自分にとって大切だったありとあらゆるものをおいてですら、嫁ぐのであれば自分の夫を何よりも愛し、夫だけに完全に身をゆだねることが求められていたというわけです。偉大な王様と結婚して一つのものとなるのであれば、その者の生き方は、ほかのものを見るのではなく、その者の生き方や優先順位は、すべて自分の愛する夫が中心のものになるのです。古いものに目を留め続けるのではなく、新しく造り変えられた者として、一つとされた者として、一つとされた夫に目を向け続けることが必要になるわけです。

そしてこれと同じ原理を、みことばは私たちに対しても語っていました。どういうことか？王であるご自分のもとに来る者に対して、イエス様は何を求めていました？マタイ10:37-38にこう書かれていました。「:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。:38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」と。ほかのだれでもありません。イエス様ご自身のことばでした。「ほかのどんなものよりもわたしを愛さないのなら、わたしにはふさわしくありません。ほかのどんなものをささげたとしても、わたしについて来ないのなら、そんな弟子はわたしにはふさわしくありません。」と。ですから、イエス様が求めていたことは明白でした。ご自分について来ようとするなら、ご自分のうちに救いを見出して、ご自分のうちに永遠のいのちを見出そうとするのなら、その者たちはすべて、イエス・キリストだけが最高の方であって、この方だけを求めていく者として歩むことが求められていたというわけです。皆さん、確かにそれは大きな犠牲でした。でも忘れてはいけないことは、本来なら私たちこそがみな、罪ゆえにさばかれて当然の存在だったということです。神様から永遠に引き離され、地獄で御怒りを受けてしかるべきなのは、私たちでした。でもそんな私たちに対して、キリストがまず愛を示してくださり、ご自分のいのちを十字架でささげてくださったのです。ご自分を信じるすべての者に罪の赦しを、救いを与えると、あわれみ深い主がそう約束してくださ

っているのです。この方が先に大きな犠牲を払ってくださいました。そうだとすれば、私たちはこの王に対して、この主に対してどのように応答しようとするのでしょうか？ひとりの註解者も、こんなことばを残していました。「母や父、息子や娘と別れるのは辛いことです。私たちはこの世の美や友情に愛着を持っています。しかし、それら全てを『忘れてしまいなさい。』王が全てを補って余りあるものを与えてくださるのです。いつかあなたは、一時的なものとの別れを振り返り、自分のためらいが愚かで根拠のないものだと思うでしょう。象牙の宮殿で、オフィルの金を身に着け、永遠の王の右の座に座るとき、以前のものに何を見ていたのか不思議に思うでしょう。後悔することは決してありません。…これから先、王だけがあなたの唯一無二の愛でなければなりません。」と。自分の両親を愛さないのではありません。隣人を愛さないのではありません。でも問われていることは、私たちがかつて大切にしていたものではなく、それら以上に私たちがイエス・キリストを愛し、従っていくということでした。自分にとって何よりもイエス・キリストがすべてなのだと、そう従っていくことが求められていたわけです。王を一番に愛すること、それが王妃に求められていたことでした。

## 2) 王に従うこと 11節

それに加えてもう一つだけ求められていた態度がありました。それが「王に従うこと」でした。続く11節を見ていただくとこう書いています。「:11 そうすれば王は、あなたの美を慕おう。彼はあなたの夫であるから、彼の前にひれ伏せ。」と。ここで「ひれ伏せ」と訳されていることば、これには「敬意を表すこと」といった意味が含まれています。そしてここから、例えば主人などに対する「忠誠心」とか「尊敬」「献身」「従順」といったいろんなかたちで用いられたりもしました。つまり、ここで作者が言わんとしていたこと、それは、花嫁となる者はこうであって、そして、自分の夫となる者に対して尊敬を払い、従っていきなさいとそう求めていたというわけです。結婚して一つのものとなる以上、妻は心からその夫を愛する者でなくてははいけませんでした。でもそれだけでなく、どんな時もその夫に対して従順でありなさいと言われていたのです。

これを聞いて思うでしょう。妻が夫に対して従っていくこと、夫が妻を愛すること、みことばはその関係に関して、私たちに対しても別の箇所では教えていました。例えばパウロはエペソ5：31-33で夫と妻の関係を表して、いや何よりもキリストと教会の関係をさしてこう述べていました。「:31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。:33 それはそうとして、あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。」と。書かれていたように、夫にも妻にもそれぞれ責任がありました。夫は何をします？夫は妻を愛すること。妻は何をします？妻は夫を敬うこと、従うことが大切だったのです。でも皆さん、それ以上にここにきわめて大切な関係が描かれていました。何か？「キリストと教会とをさして言っているのです。」と。考えてみれば、花婿である夫であるキリストは、教会のためにご自身をささげて愛を示してくださいました。では、花嫁である妻である教会は、その夫のために何をすることが求められるのでしょうか？それは、夫であるキリストにどんな時も喜んで従っていくことでした。それこそが、救われた者の生き方でした。救いをおし、十字架のみわざをおして私たちがキリストと一つとされているのなら、私たちは教会の一部であって、私たちの夫である花婿はキリストであり、私たちは花嫁である教会だ、ということです。そして私たちの責任は、その夫を心から愛して、そして、何よりも従っていくことでした。私たちが贖ってくださった王をいつも心から愛して、どんな犠牲を払ったとしてもこの方に従順に従っていかうとするのです。それが私たちにも求められていた責任でした。

詩篇に戻ると、王妃となる者はまさにそのように歩んでいました。彼女は王にふさわしい存在でした。だからこそ、その彼女は美しく飾って、式に集まった人々から大いに祝福されながら付き添いの者とともに自分を待つ王のもとへと進んでいくのです。その様子が12-15節に書かれていました。



「:12 ツロの娘は贈り物を携えて来、民のうちの富んだ者はあなたの好意を求めよう。:13 王の娘は奥にいて栄華を窮め、その衣には黄金が織り合わされている。:14 彼女は綾織物を着て、王の前に導かれ、彼女に付き添うおとめらもあなたのもとに連れて来られよう。:15 喜びと楽しみをもって彼らは導かれ、王の宮殿に入っていく。」と。着飾った美しい王妃となる者は王の宮殿へと入って行きました。王のもとへと進んで行きました。すばらしい光景だと思いませんか？この光景を覚えていた作者は、いったいどんなに心のうちに賛美や感謝があふれていたでしょう。自分の愛するその王と花嫁が一つとなる姿を覚えていた彼は、そのことにどんなにも心を躍らせていたでしょう。

### ●まとめ 16-17節

そして心踊っている中で、最後に彼はまとめとしてこのように詩篇を締めくくっていました。揺るがない将来の確信とほめ歌をもって16-17節「:16 あなたの息子らがあなたの父祖に代わろう。あなたは彼らを全地の君主に任じよう。:17 わたしはあなたの名を代々にわたって覚えさせよう。それゆえ、国々の民は世々限りなく、あなたをほめたたえよう。」と。作者が願っていたことが最後に書かれていました。「あなたの名を代々にわたって覚えさせましょう。」と。そうすればどうなるか？「国々の民は世々限りなく、あなたをほめたたえるようになります。」と。自分が愛していた偉大な王の名前が人々の間でいつまでもたたええられることを、彼は望んでいました。

でも皆さん、ここまで見てきた私たちなら思うのです。私たちも、この著者が愛していた王よりもはるかにすぐれた王を持っています。私たちは知っています。そうだとすれば、私たちは、ほかのだれでもないこの約束の救い主であり、真の王の王であるこの方をほめたたえて歩み続けていきたいと思っ  
ているでしょうか？この方の偉大さをいつも正しく覚えて、犠牲を払って従っていこうとしている  
でしょうか？この方の御名が人々の間でますますほめたたえられ続けていくことを、私たちは何よりも願っ  
ているでしょうか？「愛の歌」は私たちに大切なことを教えてくれました。「愛の歌」は私たちに、王を愛  
するということはどういうことなのかを教えてくれました。私たちのためにご自分を十字架でささげ  
てくださった、そんな勝利者であり、花婿であられる王の王であるイエス・キリスト。この方を心からほ  
めたたえ、この方を変わずに心から愛する者としてともに歩み続けていきましょう。